研究ノート

月替え収蔵資料展示の実践とその課題

柳沢芙美子・熊野　路子

福 井 県 文 書 館 研 究 紀 要
第６号　平成21年３月　抜刷

月替え収蔵資料展示の実践とその課題

柳沢 芙美子[*1]・熊野 路子[*2]

はじめに
１．閲覧室展示スペース設置の経緯
２．月替え収蔵資料展示の成果と課題
（１）多様なテーマと収蔵資料の選択
（２）業務をむすぶ展示・機関をつなぐ展示
３．アンケートの結果から
（１）入館者の構成
（２）来館の目的
（３）展示の広報媒体
（４）展示の内容
まとめにかえて

はじめに

福井県文書館では、2006年（平成18）５月から閲覧室に２台の展示ケースを設置し、月替わりで収蔵資料を紹介する展示を実施してきた。ほぼ３年間にわたるこの取組みについては、当館ウェブサイト「今月のアーカイブ」[1)] としても掲載し、講座・研修会や研究紀要等に関連し、また県立図書館・農業試験場などの他の県施設と連携するこの展示業務は当館の業務全般を連結・調整するいわばノード（結節点）のような位置を占め、一定の成果をあげてきたと考えられる。

文書館は、収集・保存した公文書等の収蔵資料を、主として「閲覧」という利用形態によって一般の利用に供する施設であるが、収蔵資料を一般的によりわかりやすく紹介するため、同時に文書館自体の役割や業務を広報するため、大半の文書館[2)] で展示が実施されている。各館においてその位置づけや展示室の有無・広さ、人的な配置などはさまざまであるが、現実として展示は文書館の普及業務のなかで重要な位置を占めているといって間違いないだろう。

ここで紹介する取組みは、専用の展示室[3)] を持たずに閲覧室の一部で展示環境を整備しながら、１か月毎に10点から100点ほどの原本資料・パネル等を紹介する小規模展示の実践例である。その規模

＊１ 福井県文書館主任
＊２ 福井県文書館主事

や展示替えの周期では、山口県文書館がすでに1978年（昭和53）１月から30年以上にわたって継続的に実施している「多彩なテーマで館蔵文書を紹介する」[4]「資料小展示」が先駆的な取組み[5]と思われる。

文書館が行う展示業務については、これまでに比較的まとまった議論や実践例[6]が蓄積されてきている。こうした論考に学びながら入館者からのアンケートの分析とともに約３年間の取組みをふり返り、その実践的な成果と今後の課題をあきらかにしていきたい。

以下、１では2006年度（平成18）に閲覧室に展示ケースを導入し原本展示ができる環境を整えていく経緯をまとめ、２では2007年度・2008年度の月替え収蔵資料展示をふり返り、その成果と課題を考察する。３では、2007年６月以降に毎月入館者に実施したアンケートの分析をおこなう。なお執筆については１・２を柳沢が、３を熊野が分担した。

１．閲覧室展示スペース設置の経緯

写真１　閲覧室展示スペース（2009年１月）

閲覧室における展示の取組みについて述べる前に、展示業務の福井県文書館における法的位置づけについて触れておきたい。

公文書館法の規定では、これまでの議論を中島康比古氏がまとめているように、公文書等の利用について「閲覧」をあげるのみであり、「展示についての明確かつ積極的な位置づけを引き出すことは難し」[7]い。国立公文書館においても、1999年（平成11）12月の国立公文書館法改正によってはじめて利用の形態が「一般の閲覧」から「一般の利用」に改められ、複写等を含むものに広げられた[8]。

一方、当館の設置に関する事項を定めた「福井県文書館の設置および管理に関する条例」では、文書館の業務（第３条）は、「１　文書等の収集、整理および保存」「２　文書等の閲覧の実施」「３　文書等に関する調査および研究」とともに「４　文書等に関する知識の普及および啓発」があげられ、展示は第４項の「知識の普及および啓発」に位置づくといっていいだろう。さらに「福井県文書館文書等利用要綱」では「文書館は、閲覧室内の展示コーナーその他適切な展示設備において文書等の展示を行うものとする。」（第13条）とされている。

もちろん展示に対して「閲覧」は、条例第３条第２項でも具体的に特出される当館における利用の主たる形態であり、「利用要綱」でも14条中９条を割いて「閲覧」に関して必要な事項を定めている。当館におけるこうした法的な枠組みを確認したうえで、展示室の一部分を割いて展示スペースを設けることになった経緯を見ていこう。

当館閲覧室（113㎡）には、2003年２月の開館当初から**図２**のように造り付け壁面ケース（幅4.2ｍ×高さ3.1ｍ）が備えられていたが、この壁面に面した閲覧室内天井の吹き抜け（約10.3ｍ×1.4

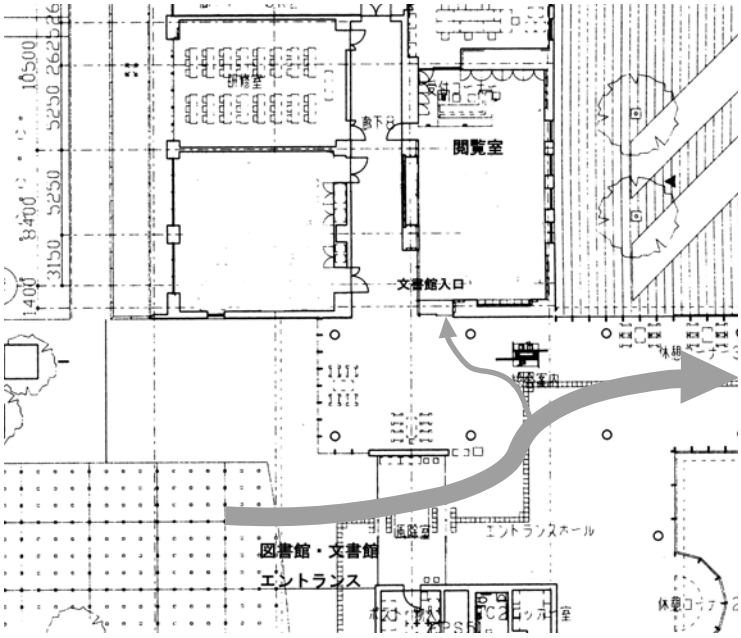


図１　エントランスから閲覧室（展示スペース）へ

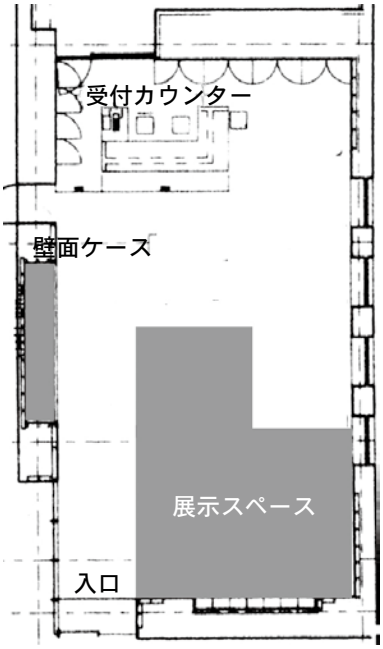


図２　閲覧室の展示スペース

m）から自然光が入る設計になっており、このケース内での原本展示は困難な状況[9]であった。当館は開館時に寄贈・寄託資料などの原本資料をほとんど所蔵していなかったこともあり、当初は複製を中心とした年１回の企画展示[10]を行い、その際に壁面ケース用のパネルを新たに更新、作製し、常設的に展示していた。

しかし、徐々に公文書の選別・収集がすすむとともに古文書等の寄贈・寄託資料が増えてくるなかで、原本展示の必要性が指摘されるようになっていく[11]。

当館は県立図書館との併設館であり、県立図書館は年間約56万人～62万人（2003年度～2007年度）の人々が訪れる施設となっている。そのエントランスから図書館入口へ流れる多数の図書館利用者の動線に対して、**図１**でみるように、文書館入口は左斜め後ろの死角に近い場所に位置している。このため、文書館入口自体がわかりにくいという指摘を以前から受けていた。文書館入口の自動ドアとその左側の広いガラス面は、内部を見とおすことができる開放性をもっているものの、入口のちょうど対面に位置する受付カウンター、奥行約14mの細長い閲覧室など、はじめて文書館を訪れる利用者が必ずしも気軽に入れる構造にはなっていない。利用と同時に収集・保存をもう一方の重要な使命とする文書館においては、資料の破損や紛失を防ぐために閲覧室は閉架式となっているが、そのため、図書館でゆったりと本を拾い読み（ブラウジング）するように、文書館資料を自由に見わたしていくことができない。その意味で、鹿毛敏夫氏が指摘したように、当館でも入館した利用者が「いきなり高次元の『対人サービス』の壁に直面させられ」「気軽な気持ちでは利用することのできない『敷居の高い』施設」[12]となっており、この入りにくさ、「敷居の高さ」を改善することが課題となっていた。

そこでより気楽に文書館に立ち寄ってもらうため、また文書館資料を広く県民に知ってもらうための一つの手段として、2005年度末に原本展示を可能にする展示ケース[13]２本を導入し、閲覧室の入口側の３分の１ほどに展示スペースをつくった（**図２**）。同時期の壁面ケースには常設的に展示する

表１　2006年度の展示テーマ

月	タイトルとおもな資料群	資料群等
５月	（漁場図、漁業原簿、太閤検地帳、若越両国全図、福井県の布令）	（公文書・古文書）
６月	（芦原大火・元禄期越前の幕府領大庄屋日記）	（公文書・古文書）
７月	むしばまれる文書	（公文書・古文書）
８月	福井に伝わる江戸末期の医学書	C0126真田一郎家文書
９月	まちづくりの原点－都市計画と風致地区－	（公文書）
10月	国宝・文化財の記録	（公文書）
11月	コシヒカリ育成記録展	（行政刊行物等）
12月	江戸時代の読物とガイドブック	C0037吉川充雄家文書
１月	セピア色の新聞写真展－大正・昭和の日曜版から－	N0055桜井市兵衛家文書
２月	鉄道員父子の残した路線図展	（借用資料）
３月	三国を結ぶ鉄道の資料	（借用資料）

写真２　2006年８月ポスター

写真３　2006年11月ポスター

写真４　2006年11月「コシヒカリ育成記録展」

ことができるパネル（「福井県文書館の役割」「文書館の４つのしごと」「おもな収蔵資料」）を作製した。

2006年（平成18）５月の連休に、この２本の展示ケースを用いて、魯迅の日本留学時代の恩師として知られる藤野厳九郎家の資料（寄託）について特別展「藤野先生の手紙」（４月29日～５月７日）を開催し、書簡・卒業証書、手製のフランス語教科書など８点の原本展示を行い、あわせて、寄託資料のカラー複製本、魯迅の講義ノート（複製）[14]、写真パネルなどを出展した[15]。

これ以降、展示ケース２本を活用して小展示を実施していくことになる[16]が、この小展示を継続して行うためには二つの点で問題があった。

その一つは閲覧室の展示環境である。そもそも閲覧室は閲覧のために設計された空間であり、原本資料を展示できる環境ではない。そのため窓や照明を調整し、展示ケースへの露光を制限する必要があった。具体的には、入口とその左側のガラス壁面・壁面ケース斜め上の吹き抜けの排煙窓に紫外線カットフィルム[17]を施工し、中庭側窓のスクリーンの常時全閉、展示ケー

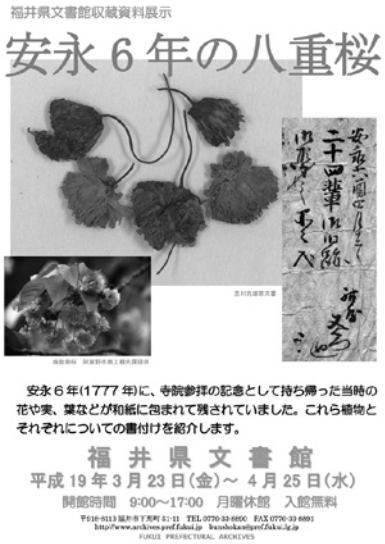


写真５　2007年４月ポスター

写真６　2007年７月ポスター

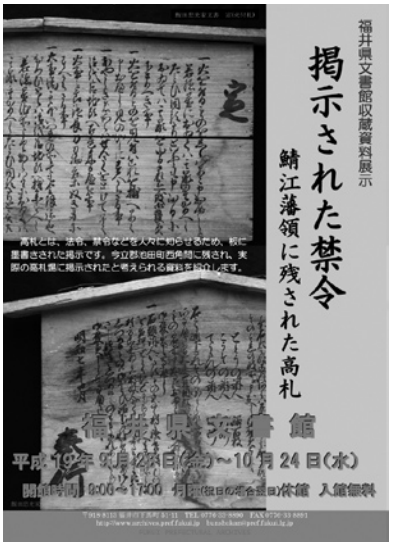


写真７　2007年10月ポスター

ス上のペンダント照明・展示ケース内の照明の常時消灯、照明を落としている理由を説明するパネルの掲示、開館時間外に展示ケースに黒色布カバーをかける、などの対策をとった[18]。そのうえで博物館の展示基準等を参考に、同一資料の原本展示期間を原則として１か月を限度として、月毎に展示替えを行うことにした。

もう一つの問題点は、テーマの取り上げ方や資料の選択、展示技術といった職員の側の問題であり、これは即座に改善できるものではなかった。紹介すべき資料の選択について、ケース導入当初の2006年度はかなり苦労しており、この年度は月替え展示の位置づけをめぐって試行錯誤ともいえる期間であった。

表１でみるように５・６月にはまだ月毎のテーマ設定ができず、２・３月に入っても県史収集として複製本を公開している資料群ではあるが、借用資料を中心とした展示を行っていた。また、月替えのための準備のサイクルやポスターの作製[19]、標準的な広報手段[20]が整ってくるにはある程度時間が必要だったということだろう。もっともこの職員の展示技術の問題は、一朝一夕に改善されるものではなく、その後２年間ほどでテーマ設定のアイディアや画像処理・パネル作製などのノウハウがようやく少しずつではあるが蓄積されつつある状態である。

ただ2006年度中の展示のなかで、８月「福井に伝わる江戸末期の医学書」（**写真２**）、11月「コシヒカリ育成記録展」（**写真３**）は、それぞれ併設の県立図書館（特別展「杉田玄白と解体新書」）と、農業試験場・県農畜産課（「コシヒカリ育成50周年ＰＲ事業」）と連携したものであり、翌年度以降の連携的な企画を準備する契機となったといえる。「コシヒカリ育成記録展」では、農業試験場から受け入れ

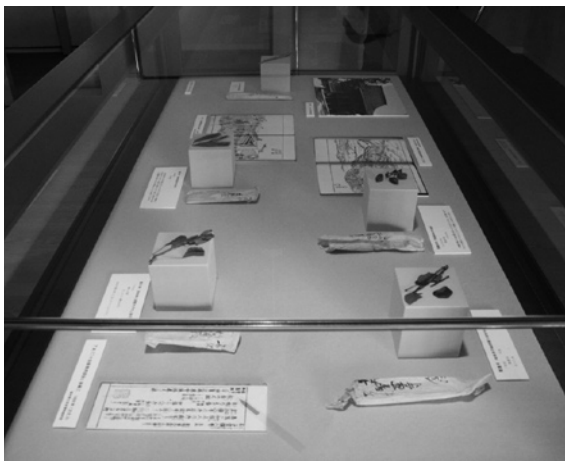


写真８　2007年４月植物を含む展示

表２　展示テーマと概要（2007・2008年度）

年月	タイトルとおもな資料群	概　　要
平成19年度 ４月	安永６年の八重桜 C0037**吉川充雄家文書**	1777年（安永６）に、親鸞旧跡の寺院参拝の記念として持ち帰った八重桜の花やクリ・カヤの実、松・笹・イチョウなどの葉とその包紙を展示。
５月	藤野先生の手紙２ C0125**藤野厳九郎家文書**	1901年（明治34）に全国で医学専門学校が相次いで開校し、藤野厳九郎は、金沢と仙台から着任を要望されていた。「藤野先生」が受け取った手紙から、魯迅と出会う仙台医専へ赴くに至った経緯を紹介。
６月	むしばまれる資料 **当館公文書・古文書・行政刊行物**	当館の収蔵資料に残っている虫・かび・水害などによる損傷、フィルムの劣化と、その対処方法、補修や対処法の一部を紹介。関連：資料保存研修会
７月	福井藩士の住宅地図 X0142**山内秋郎家文書・松平文庫【借用】**	山内家の「福井藩家中絵図」と松平文庫の関係資料から幕末福井藩の家臣屋敷地図を復元した。由利公正・横井小楠などの居住地がわかる。関連：図書館企画展
８・９月	[企画展示] ふくいで学ぶ－地域の手習いと教科書 **当館古文書・借用資料**	江戸時代から明治にかけての入門的な往来物・教科書や手本のうち、県内で編集・出版されたもの、あるいは使われていたものを展示。 師匠（先生）の側に残った門人帳や手本控、子どもの側に残った手習いの手本を展示。
10月	掲示された禁令－鯖江藩領に残された高札 G0013**飯田忠光家文書**	江戸時代中期から明治時代の初期にかけて法令、禁令などを人々に周知徹底させるために掲示された高札５点（原本４点、写真パネル１点）。裏書の墨書から実際に西角間村の高札場に掲示されていたものと考えられる。
11月	逃散・身売り・なりわい －江戸時代はじめの漁村資料から D0075**玉村九兵衛家文書**	（１）子どもの永代売渡し証文、製塩や船の所有などの生業にかかわる文書、（２）逃散の事例を紹介。いずれも中世末から近世社会へと移り変わる村のようすをよく示している興味深い内容。
12月	古文書に親しもう －教科書にでてくる人物・資料 **当館古文書**	柴田勝家や太閤検地帳など、中学校・高校の教科書でもおなじみの人物や資料を紹介。関連：古文書入門講座
１月	新年・吉日・こよみ展 **当館古文書**	江戸時代から大正期にかけて県内で使われていた暦を紹介。江戸時代の柱暦（京暦）、太陽暦が導入された1873年（明治６）の暦、商店の宣伝用のチラシに暦をつけた引き札暦など。
２月	ちょっと昔の福井県写真展－あわら市・坂井市編 **県広報写真**	収蔵する県広報写真フィルムから、昭和30年代から40年代のあわら市・坂井市の写真を紹介。展示説明会（2/9・2/19）
３月	ちょっと昔の福井県写真展－福井市編 **県広報写真**	収蔵する県広報写真フィルムから、昭和30年代から40年代の福井市の写真を紹介。展示説明会（3/8・3/22）
平成20年度 ４月	古文書に親しもう２ B0037**勝見宗左衛門家文書**・N0055**桜井市兵衛家文書**	当館が収蔵している資料のうち、おもに古文書講座で用いている福井県内に伝えられてきた刊本を展示。
５月	だるま屋少女歌劇－プログラムとブロマイド A0502**高田富家文書**	だるま屋少女歌劇に出演していた高田富氏が収集したプログラムとブロマイドを展示。来館者に思い出を寄稿してもらう「おしえて！だるま屋少女歌劇」コーナー設置。展示説明（5/3・5/18）
６月	むしばまれる資料 **当館公文書・古文書・行政刊行物**	収蔵資料に残っている虫、かび、金属、テープなどの被害やもろくなった酸性紙を展示し、その対処方法、和紙を利用した簡易な補修法を紹介。
７月	御触（おふれ）から県報へ **当館公文書・古文書**	江戸時代の「御触（おふれ）」と同様に書き写され回覧されていた明治初期の布令から、印刷されて広く配布される「県報」までの歩みを展示。 関連：資料保存研修会
８・９月	[企画展示] 授業にでてくるふくいの史料 **当館収蔵資料・借用資料**	織田信長や柴田勝家、杉田玄白や由利公正など学校の授業で取り上げられる人物に関連した福井県の史料を展示。展示説明（8/9）　リーフレット作成　関連講演会「教材で使う史料・学んでほしい史料」（8/31）
8/29～ 9/15	新出資料展示　最も古い「三くだり半」 D0075**玉村九兵衛家文書**	関連県史講座「三くだり半の世界－福井県の事例から」（9/15）
10月	ちょっと昔の福井県－スポーツ編 **当館公文書・古文書・県広報写真**	当館が収蔵している昭和30年代から40年代の福井県広報課写真のうち、県民体育大会のようすなどを展示。『小学読本』（明治８）のボール投げ図、マラソン競走双六（明治42）、野球競技盤（大正14）など明治時代から大正時代のスポーツについても紹介。
11月	ちょっと昔の福井県－大野市・勝山市編 **当館公文書・古文書・県広報写真**	当館が収蔵している昭和30年代から40年代の福井県広報課写真のうち、大野市・勝山市の写真や大野市・勝山市域から寄贈・寄託された「公政館日誌」（慶応４）「繭売買帳」（大正10）等を展示。
12月	古文書に親しもう３－かなをたよりに読む N0055**桜井市兵衛家文書**・X0142**山内秋郎家文書**	当館が収蔵している資料のうち、古文書入門講座で用いているものを展示。古文書をこれまで一度も見たことがない人々も対象に、和書原本19点、パネルを紹介。関連：古文書入門講座
１月	文書館で初もうで－寺社名所案内図 B0037**勝見宗左衛門家文書**・G0024**飯田広助家文書**・N0055**桜井市兵衛家文書**	江戸時代から大正期までの奈良・伊勢・本願寺・善光寺・白山などで参拝客の「おみやげ」用に作られた名所案内図を展示。
1/28～2/8	ミニ資料展示（緒方洪庵翻訳書・著書） C0126**真田一郎家文書**	図書館展示・講演会（ドラマ化記念「築山桂」特集）に関連して『扶氏経験遺訓』『病学通論』を展示。
２月	花押は語る－朝倉氏の織田支配 X0142**山内秋郎家文書**	花押研究によって明らかになった中世における丹生郡織田地域の支配者や支配のありようを、資料に記された花押に即して紹介。関連：県史講座
３月	ちょっと昔の福井県５－鯖江市・越前市編 **当館古文書・県広報写真**	鯖江市の越前漆器や越前市の越前打刃物製作、両市の市街地のようすなど昭和30年代から40年代を中心とした写真を展示。あわせて武生町「新規魚市場設置願」（明治18）、『福井県写真帖』など。

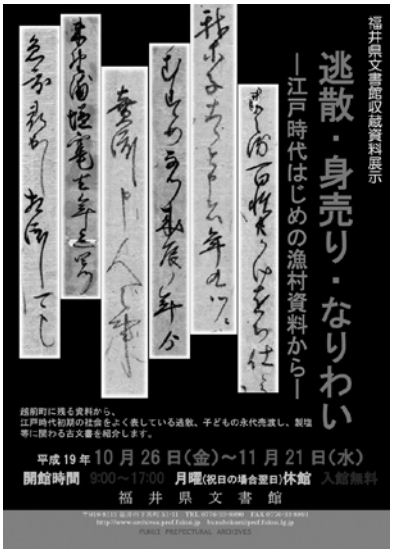


写真９　2007年11月ポスター

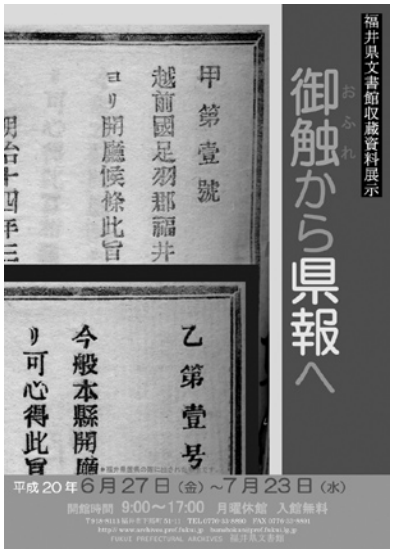


写真10　2008年７月ポスター

写真11　2008年５月ポスター

たコシヒカリ育成時の観察野帳、農業関係の行政刊行物など原本約30点、コシヒカリの稲株標本などの「物」資料も展示した（**写真４**）。

２．月替え収蔵資料展示の成果と課題

（１）多様なテーマと収蔵資料の選択

それでは、2007年度（平成19）・2008年度の月替え収蔵資料展示をふり返り、その成果と課題をみていこう（テーマと概要は**表２**を参照）。いずれも展示ケース２本による原本資料展示に加え、展示用ボード０～４本ほどでパネル、閲覧用テーブル２台による複製本等を展示した。パネル・ポスター等の作製予算は持たず、これらは職員によるものである。

なお、夏季に約２か月間をとおしてひとつのテーマで実施した企画展示（この際も１か月単位で展示替えを実施）は、壁面ケース用のパネル・リーフレット・ポスター・複製本等の作製予算をもち、通常の展示ケース２台に加え、展示用ボード２～４本によるパネル展示、閲覧用テーブル３台を使った複製本等の展示が加わり、展示用スペースは閲覧室の約半分ほどに広がっている。

まずこうした小規模展示のメリットとしては、短い展示周期とコンパクトな展示資料点数で多様なテーマと収蔵資料が紹介できる点があげられよう。

気楽に文書館に立ち寄ってもらうための一手段として実施する展示であるので、全般的には絵図やパンフレット、挿絵入りの刊本、暦、カレンダー、写真など視覚的に一般の目を引きやすい資料を選択している。植物（2007年４月）、資料から外された虫ピンやクリップ類（2007年６月、2008年６月）、高札（2007年10月）などの「物」資料を取り上げる場合もあった。とくに2007年２月から開始した文書館へ移管された県広報写真を地域別に紹介していく「ちょっと昔の福井県」シリーズは、広報写真には撮影年月日や撮影対象を特定できるものが多く、写真の利用に結びつく可能性が大きい。広報写真の整理が進むにしたがって利用できる画像が増えているため、今後も継続して取り組める題材である。いずれも資料群のなかにあって取得や利用の経緯がわかるものが少なくなく、このことは単なる

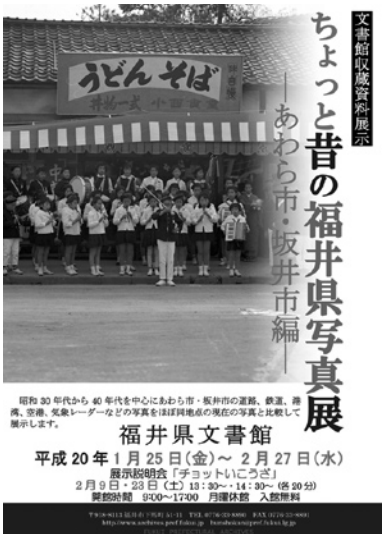


写真12　2008年２月ポスター

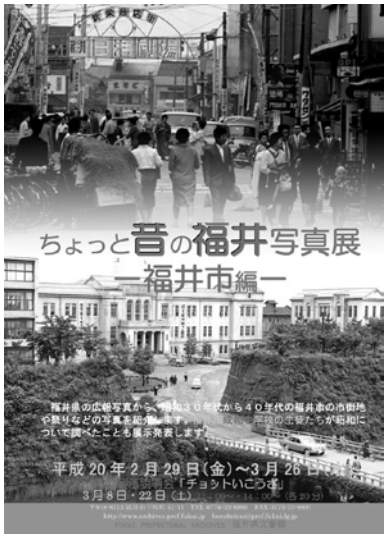


写真13　2008年３月ポスター

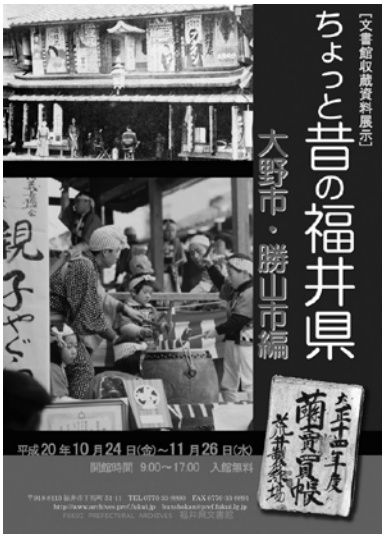


写真14　2008年11月ポスター

コレクションとは異なる文書館資料の特徴でもあるので、そうした関連資料でわかる内容も解説パネルで触れるようにした。

興味深いことは、展示を通じて入館者から当時の県内のようすについて情報を寄せてもらったこともたびたびあったことである。こうした側面に注目して（閲覧室という制約を考慮しなければならないが）高齢の入館者を中心に地域に共有されている記憶を語ってもらう、あるいは入館者に撮影時期や対象等がわからない写真について情報をよせてもらうなど、展示にはさまざまな可能性があるように思われる。そうした可能性に一部踏み込んだ事例として2008年５月の「だるま屋少女歌劇－プログラムとブロマイド」があげられる。だるま屋少女歌劇は、福井駅前の県内初の百貨店だるま屋が採用・養成して発足した少女歌劇で、1931年（昭和６）11月から36年７月まで月毎にプログラムをかえながら店内で上演されていた。この展示には少女歌劇や百貨店について懐かしい思い出をもった80代・90代の方々が多数みえ、「おしえて！だるま屋少女歌劇」のコーナーに証言（あるいは館職員による聞き取り）23件を寄せてくださった[21]。

もう一方で、展示周期が短く規模が小さいということは、対象や目的を明確にして、時には一般にとっつきにくい題材を取り上げることもできる。つまり多くの入館者数を見込めないような題材、展示には不向きだといわれる文書類にあえて焦点をあてることも可能となる。文書館の展示は、イメージアップのための宣伝ではないのだから、歴史的な事実として地域に存在した貧困・災害・戦争などのいわゆる「負の側面」[22]に関わるテーマにも光をあてることは重要だろう。2007年11月「逃散・身売り・なりわい」（**写真９**）は、子どもの永代売渡し証文や逃散に関連した古文書９点を紹介したものであり、この資料から取材した脚本『逃散』（県立図書館から借用）、1685年（貞

写真15　2008年５月展示説明会

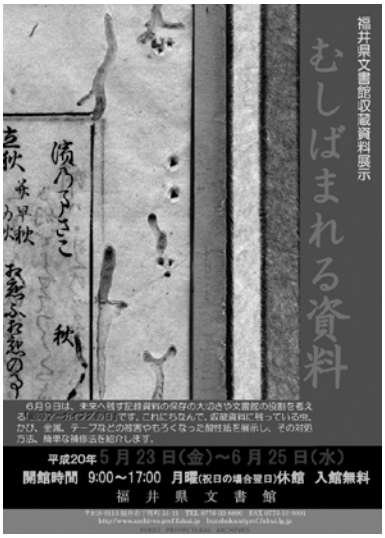


写真16　2008年６月ポスター

写真17　2008年12月ポスター

写真18　2009年２月ポスター

享２）「越前国之図」の越前海岸部分の画像（県立図書館提供）とともに展示した。また2008年11月「ちょっと昔の福井県－大野市・勝山市編」では、展示ケース１本で1965年（昭和40）９月の風水害で壊滅的な被害を受けた大野郡西谷村の写真を県広報誌『県民グラフ』や公文書とともに展示している。その意味では戦時下の文書館資料の紹介については、当館で今後取りあげなければならないテーマの一つだろう。

また、2008年７月の「御触（おふれ）から県報へ」は、一見堅苦しく一般になじみは少ないが、法治国家における行政の機関紙である県報の歩みを概観したものである。これには充実した先行事例として埼玉県立文書館展示「行政情報史の130年－埼玉県設置から電子県庁構想まで」や東京都公文書館ウェブサイトの「東京都公報の歴史－町触から公報まで」[23] があり、参考にさせていただいた。

アンケートを分析すると、それぞれのテーマによって回答者の男女比・世代等に興味深い傾向がみられた（**３**参照）。こうした結果を参考にしながら、５月の連休や年末年始休暇等にあわせた展示の重点化、同時に既に実施したテーマの改善による再展示[24] や「ちょっと昔の福井県」「むしばまれる資料」のようなシリーズ化によるテーマ設定にかかる労力の軽減などを含めて、今後より広い層に、ときにはターゲットを絞ったより多様な企画が必要だろう。

（２）業務をむすぶ展示・機関をつなぐ展示

小規模展示のもう一つのメリットは、閲覧利用との関連はもちろんであるが、時々の講座・講演会や研究紀要の成果など、文書館の他の業務との結びついた展示も可能となる点だろう。

閲覧への導入としては、当館の場合、県史編さん時に調査・撮影したマイクロフィルムによる複製本約31,000冊を所蔵し、開館後受

写真19　複製本による展示

け入れた寄贈・寄託資料等についても大半を撮影しカラー複製本を作製している。これを利用して展示で取り上げた資料群の複製本を閲覧用テーブル２～３台にひろげ、閲覧を促がしている。複製本によって、冊子体や裏書のある原本資料の展示部分以外を見ることができ、なにより資料群に含まれる他の資料を目にする機会となる[25]。また多くの館ですでに採用されていることであるが、解説パネルにはレファレンスコード（公文書では簿冊整理番号、古文書では資料群番号・資料番号、行政刊行物では管理番号）を付け閲覧の便宜をはかることは基本的な事項だろう[26]。

これに対して、講座等に関連した展示（2007年６月・2008年６月は資料保存研修会、2007年12月・2008年４月・12月は古文書入門講座に関連）や研究紀要の成果（2007年７月は『研究紀要』４、2009年２月は2007年度講演会と『研究紀要』６に関連）を取り上げたものは、講座等への参加者・参加しないが関心のある層に閲覧室に立ち寄ってもらう機会となり、また紀要での関連資料の検証や作図が展示に厚みを加えている。今後は、これ以外にも学校支援として取り組んでいる中学生や高校生への働きかけ[27]や、資料集として刊行している『福井県文書館資料叢書』に関連した展示を企画することも可能だろう。

こうした連携の視点は、展示を他機関と連携して行う可能性にもつながっている。すでに述べたように併設館である県立図書館との連携は、2006年度にも試みられ、2007年７月「福井藩士の住宅地図」は、図書館特別展示「歴史資料の宝庫　松平文庫へのいざない」に関連して、文書館蔵の絵図と松平文庫の城下絵図を照応させた展示であった。2009年１月末には図書館展示・講演会に対応するミニ展示[28]にも取り組んでいる。

こうした他機関との連携展示、さらには出張展示の事例は、すでに広島県立文書館・沖縄県公文書館[29]などの報告がある。「地方へ出張して、その土地のアイデンティティーとも言うべき記録史料を展示することは、文書館の展示室で実施する場合とは比較にならないほど、多くの人々の関心を引き出す」[30]との西向宏介氏の指摘は、当館の３年ほどの短い経験に即してみても頷ける。１日あたりの入館者数の上位が、「ちょっと昔の福井県」シリーズの福井市編（44.0人）、あわら市・坂井市編（38.6人）、大野市・勝山市編（38.3人）といずれも地域をテーマにした展示であり、一般に親しみやすい写真という要因を差し引いても[31]、大きな反響を得ていたことがわかる。福井県という地域を固有の対象としている自治体の文書館にとって、地域はテーマとしても、また出張展示という手法としても今後取り組んでいく必要があるだろう。

当館にとって展示は、これまで取り組んできた収蔵資料の紹介を核にしながら、講座・学校支援などの普及業務、研究業務など館が取り組む各種業務、さらには図書館・博物館・県内研究機関、その他機関と連携して実施することによって、より効果的な広報手段となると考えられる。

３．アンケートの結果から

2007年６月「むしばまれる資料」から、2009年（平成21）１月「文書館で初もうで－寺社名所案内図」までに行なったアンケート[32]をもとに、それぞれの展示に対する入館者の傾向、反応などをまとめた。この期間中の入館者数[33]は13,427人、平均入館者数[34]は27.1人/日、アンケート回答率は5.0％であった（**表３**）。アンケート回答率が低いため、このデータがそのまま入館者すべてのデー

表3　入館者数とアンケート回答率

2007年度（平成19年）	入館者数	開催日数	入館者数（人／日）	アンケート回答数	回答率
6月　むしばまれる資料	731	31	23.6	51	7.0%
7月　福井藩士の住宅地図	676	21	32.2	68	10.1%
8・9月　（企画展示）ふくいで学ぶ－地域の手習いと教科書	1,580	52	30.4	68	4.3%
10月　掲示された禁令－鯖江藩領に残された高札	516	23	22.4	30	5.8%
11月　逃散・身売り・なりわい－江戸時代はじめの漁村資料から	495	23	21.5	25	5.1%
12月　古文書に親しもう－教科書に出てくる人物・資料	537	30	17.9	19	3.5%
1月　新年・吉日・こよみ展	439	17	25.8	30	6.8%
2月　ちょっと昔の福井県写真展－あわら市・坂井市編	1,120	29	38.6	64	5.7%
3月　ちょっと昔の福井県写真展－福井市編	967	22	44.0	48	5.0%
小計	7,061	248	28.5	403	5.7%
2008年度（平成20年）					
4月　古文書に親しもう 2－古文書を読んでみませんか	328	23	14.3	11	3.4%
5月　だるま屋少女歌劇－プログラムとブロマイド	754	23	32.8	54	7.2%
6月　むしばまれる資料	461	29	15.9	13	2.8%
7月　御触（おふれ）から県報へ	394	23	17.1	5	1.3%
8・9月　（企画展示）授業に出てくるふくいの史料	1,783	51	35.0	76	4.3%
10月　ちょっと昔の福井県－スポーツ編	567	23	24.7	13	2.3%
11月　ちょっと昔の福井県－大野市・勝山市編	1,110	29	38.3	64	5.8%
12月　古文書に親しもう 3－かなをたよりに読む	479	26	18.4	8	1.7%
1月　文書館で初もうで－寺社名所案内図	490	21	23.3	25	5.1%
小計	6,366	248	25.7	269	4.2%
計	13,427	496	27.1	672	5.0%

注　■は入館者数・回答率が平均値より上のもの。

タをあらわしているとは言い切れないが、一定の傾向は見出せるのではないだろうか。

質問項目は、性別、年代、来館目的、展示の開催を知った広報媒体、展示の内容、展示数、展示の説明文についてそれぞれ選択式で答えてもらう設問７問と、自由回答欄という構成となっている[35)]。

（1）入館者の構成

まずは入館者の傾向について考えてみたい（**図３－１～２**）。

アンケート回答者の70.2％が男性であり、49.6％が50代以上の男性である。このことから、閲覧室入館者の大半は50代以上の男性であると考えられる。

月ごとに男女の割合を比べると、ほとんどが男性３に対して女性１であるが、女性の割合が50％に近くなるもの（2008年３月、2008年５月）や、女性の回答数が０のもの（2008年７月）などテーマによって男女比にばらつきがあることがわかる。全般的に視覚に訴えるテーマのほうが、女性が増える傾向にあるようである。また、2008年12月の「古文書に親しもう３」では、回答者の50％を60代の男性が占めている。この回は実際に古文書を読むということに関心の高い層が来館したといえるのではないだろうか（**図４、図５**）。

図３　アンケート回答の設問別構成比

図3-1　性別

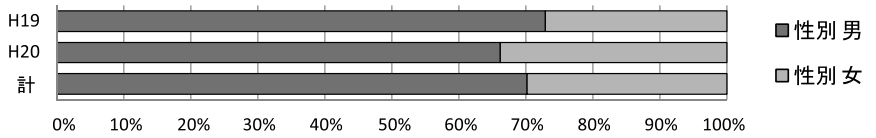


図3-2　年齢

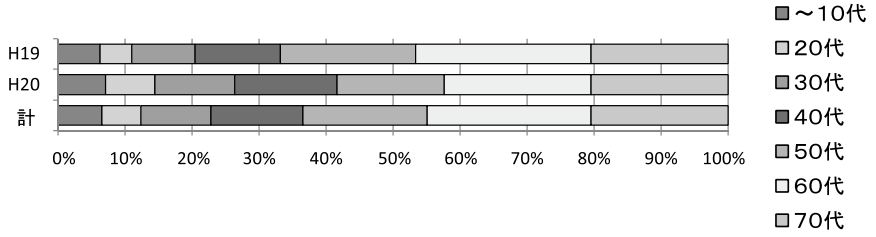


図3-3　ご来館の目的は何ですか。

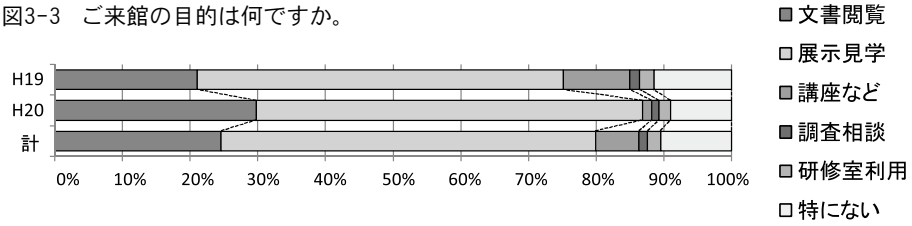


図3-4　展示の開催を何でお知りになりましたか。

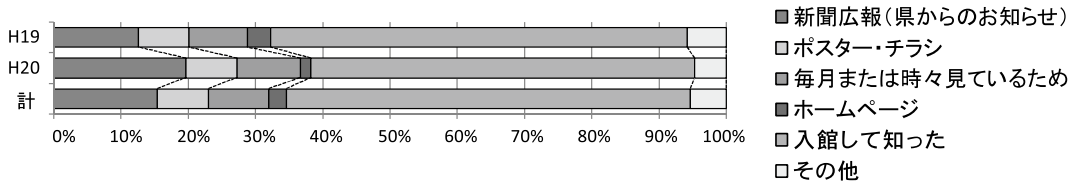


図3-5　展示をご覧になった感想をお聞かせください。

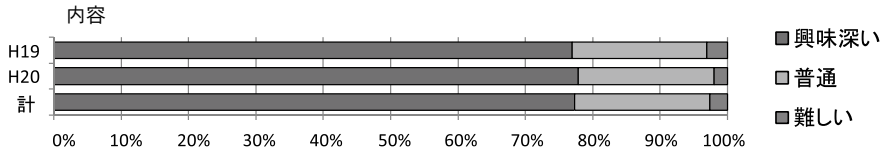


図3-6　展示をご覧になった感想をお聞かせください。

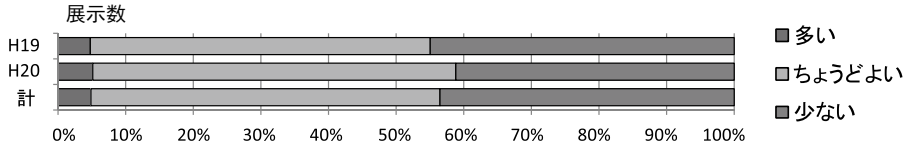


図3-5　展示をご覧になった感想をお聞かせください。

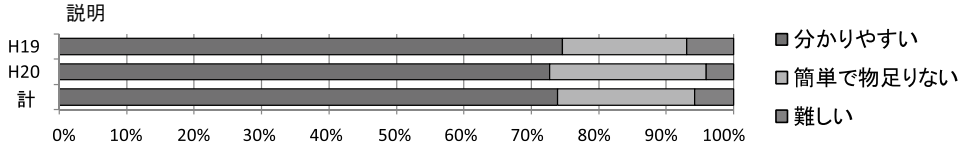
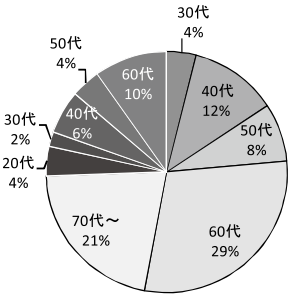
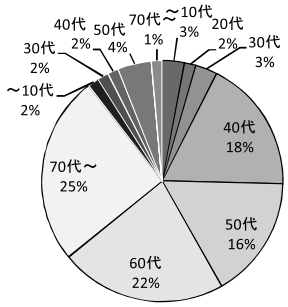


図４　2007年アンケート回答者の性別と世代構成

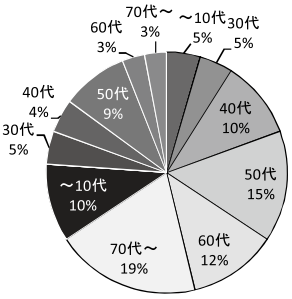
H19.6　むしばまれる資料



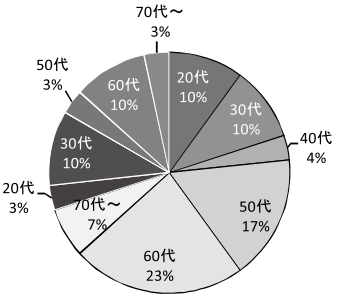
H19.7　福井藩士の住宅地図



H19.企画展　ふくいで学ぶ―地域の手習いと教科書

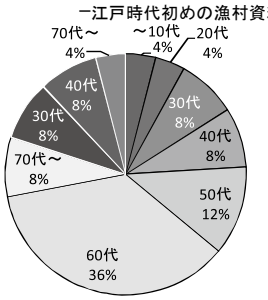


H19.10 掲示された禁札―鯖江藩領に残された高札



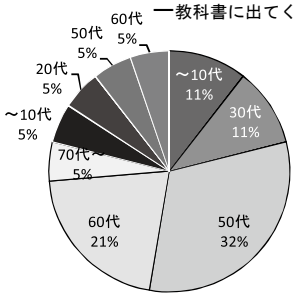
H19.11 逃散・身売り・なりわい

―江戸時代初めの漁村資料から

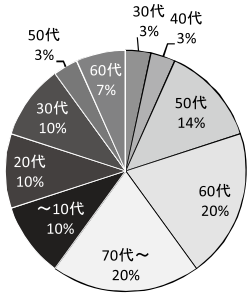


H19.12 古文書に親しもう

―教科書に出てくる人物・資料

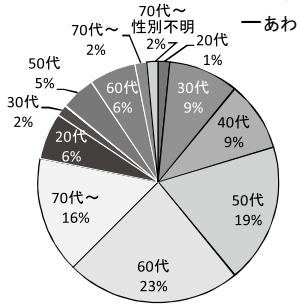


H20.1 新年・吉日・こよみ展

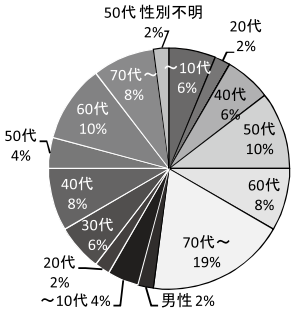


H20.2 ちょっと昔の福井県写真展

―あわら市・坂井市編



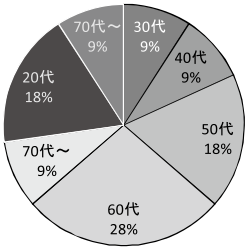
H20.3 ちょっと昔の福井県写真展―福井市編



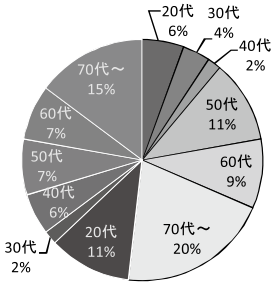
■～10代 男性　■ 20代 男性
■ 30代 男性　■ 40代 男性
■ 50代 男性　□ 60代 男性
□70代～ 男性　■ 男性
■～10代 女性　■ 20代 女性
■ 30代 女性　■ 40代 女性
■ 50代 女性　■ 60代 女性
■70代～ 女性　□50代　性別不明
□70代～　性別不明

図５　2008年アンケート回答者の性別と世代構成

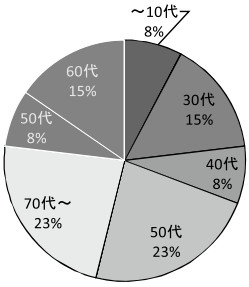
H20.4 古文書に親しもう2



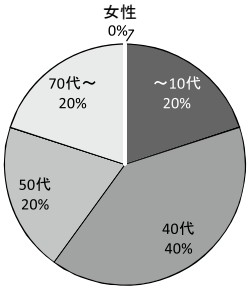
H20.5 だるま屋少女歌劇―プログラムとブロマイド



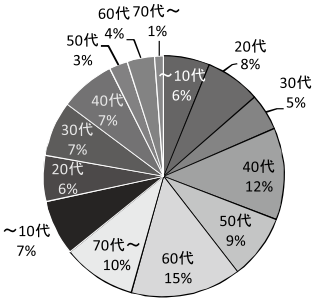
H20.6 むしばまれる資料



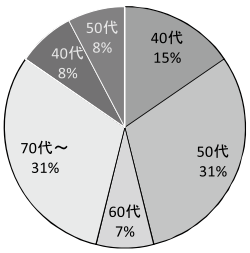
H20.7 御触（おふれ）から県報へ



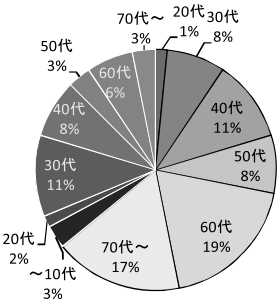
H20.企画展　授業にでてくるふくいの史料



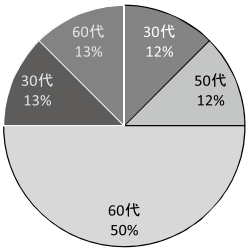
H20.10 ちょっと昔の福井県―スポーツ編



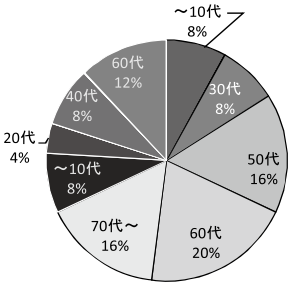
H20.11 ちょっと昔の福井県―大野市・勝山市編



H20.12 古文書に親しもう3―かなをたよりに読む



H21.1 文書館で初もうで―寺社名所案内図



■～10代 男性　■ 20代 男性　■ 30代 男性
■ 40代 男性　■ 50代 男性　■ 60代 男性
□70代～ 男性　■～10代 女性　■ 20代 女性
■ 30代 女性　■ 40代 女性　■ 50代 女性
■ 60代 女性　■70代～ 女性

（2）来館の目的

来館の目的をみると、展示見学が全体の55.3％と最も高く、ついで文書閲覧24.6％となっている（**図3－3**）。このことから、展示自体を目的に入館された人が約半数と多いことがわかる。ただアンケート回答者の４分の１は閲覧利用者でもあり、閲覧利用者は展示を観覧し、アンケートにも回答する率が高い文書館利用者のもっとも中核的な層であることが確認できる。

2007年度と2008年度のアンケートを比較してみると、文書閲覧の回答率が8.7％増えていることから、少しずつではあるが、文書館の「閲覧」に対する敷居が低くなりつつあると考えてよいのではないだろうか。

また、来館目的が特にないと回答した人も10％おり、その中には併設の県立図書館を利用したついでに文書館に入館したという人も一定数いると思われる。

（3）展示の広報媒体

次に、展示についてどの広報媒体で知ったかという設問に対しては、「入館して知った」という回答が60％と圧倒的に多く、さらに広報の余地があることを感じさせる（**図3－4**）。ただし、この「入館して知った」という表現を、県立図書館・県文書館の敷地内に入って館内のポスター等で展示の開催を知ったという意味にとるならば、館内での広報の効果が上がっていると見ることもできるだろう。

また、新聞広報（「県からのお知らせ」）で知ったという回答も19年度では12.6％、20年度では19.6％あり、広報の効果はあるといえそうだ。新聞は文書館来館者の大半を占める年代の層にはよく読まれているという点でも、効果的な広報媒体であるといえそうである。

（4）展示の内容

展示の内容に関しては、回答者全体の77.3％が興味深いと回答している（**図3－5**）。展示数は51.6％がちょうど良いと感じており、展示の説明は73.9％の人が分かりやすいと答えている（**図3－6**、**図3－7**）。このことから、おおむね来館者のニーズにあった展示をしてきたということができそうだ。

ただし、テーマによって、難しいと感じるものや展示数が少ないと感じるものもあるようだ。「御触から県報へ」（2008年７月）や「むしばまれる資料」（2007年６月、2008年６月）などはより目を引く工夫を凝らす必要があるかもしれない。

また、意外なことだが、写真展（2008年２月、３月、10月、11月）は、展示数が少ないと感じる人もいるようだ。実際の展示数では35点から50点とそれほど少なくはないはずなのだが、写真は見る人の思い出が喚起されやすく、懐かしさを呼びさます資料であるため、物足りなさを感じてしまうのかもしれない。

自由回答欄では、様々な感想、要望など多数のご意見をいただいた。255件ある意見のうち、56.1％が展示に関する感想、37.1％が文書館に対する要望やご意見だった。なかには厳しいご指摘をいただいていたものもあるが、おおむね好意的に感じてくださっているようだ。これについては他の

アンケートとともに機会を改めて検討する必要があるだろう。

まとめにかえて

以上、ささやかながら当館閲覧室における月替え収蔵資料展示の実践から得られた知見についてまとめてきた。すでにこれまでの論考で指摘されているように、展示で多数の入館者を得ても多くの場合閲覧利用にまで結びつくものではない[36]。当館の利用統計でみても、利用（入場）者数は年々増加し１万人を超えているのに対し、残念ながら閲覧申込者数はここ数年500人未満に止まっている。しかしながら、この閲覧室展示を通して少なくとも閲覧室入館者[37]は確実に増加しており、県民が文書館資料の一端を目にする機会がふえ、直接的・間接的に文書館の役割や使命を紹介する機会となっている。白井哲哉氏が指摘したように自らの関心にしたがって目録を検索し能動的に閲覧する行為と、展示観覧の間の隔たり[38]は予想以上に大きいが、多様なテーマで収蔵資料をよりわかり易く、効果的に紹介する手法の研究を通して、あるいはその議論をとおしてその距離をわずかずつ狭めることができればいいと思う。

ただ展示によって紹介できる資料数は、当館の場合で年間でも約250～400点ほどであり、閲覧可能資料点数18万点に対してあまりにも僅かである。その意味では自明のことではあるが、収蔵資料に関する情報提供の手段として展示を位置づけることはできず、図書館で書架を「ブラウジング」するような気軽さで文書館の資料群[39]を視覚的に概観できる工夫が求められている。

また閲覧室の一角での展示であるので、閲覧と展示という異なる目的の間で展示環境を調整していくことは、今後も課題である。

注

1）2007年１月20日開設、「今月のアーカイブズ」は福井県文書館ウェブサイト，http://www.archives.pref.fukui.jp/fukui/08/m-exhbt/AMindex.html,（参照2009-02-10）.

2）たとえば、国立公文書館が主催する全国公文書館長会議「全国公文書館関係資料集」（2008年５月）によれば、56機関（国４・都道府県30・政令指定都市７・市区町村15）中53機関が何らかのかたちで展示活動を行っており、都道府県の30館ではすべての館で実施されている。

3）都道府県の文書館30館のうち20館が専用の展示室を有している。豊川公裕「文書館展示のあり方－千葉県文書館企画展を例に」（『千葉県の文書館』９、2004年）論文の表１をもとに、その後開館した福井・岡山・奈良を追加した。

4）「山口県文書館の業務」。山口県文書館ウェブサイト，http://ymonjo.ysn21.jp/introduction/int_business.html,（参照 2009-02-10）.

山口県文書館では、閲覧室に展示ケース２本を設置し、基本的に１か月を周期に展示替えをおこなっている。パネルやポスターも職員の手作りという点も、当館の月替え展収蔵資料展示と同様である（電話聞き取り2009-01-21）。

5）和歌山県立文書館でも閲覧室の一角にケース１台（114cm×114cm）を置き、1997年度から1999年度にかけては２か月から９か月ごとにテーマを替え、近年ではほぼ２か月毎に資料を入れ替える展示を行っている（「展示業務の紹介」『和歌山県立文書館紀要』５、2000年」、電話聞き取り2009-01-21）。

6）展示論は、文書館のおもな利用のあり方としての「閲覧」とのかかわり、収集・保存、調査・研究といった館全体の業務とのバランス、展示を主要な業務とする博物館との差異をめぐって議論が重ねられている。1997年までのものとしては、白井哲哉「文書館展示の実践的考察」『アーキビスト』43、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会関東部会 1998年参照。これ以降では、

白井哲哉「文書館普及活動における二つの試み」『文書館紀要』11、埼玉県立文書館1998年

吉江剛「文書館における展示の意義－利用としての展示を考える」『双文』16、1999年

西向宏介「広島県立文書館における展示活動の課題」『広島県立文書館紀要』５、1999年

久部良和子「公文書の利用と普及（移動展の役割）－八重山・名護・宮古の事例より」『沖縄県公文書館研究紀要』２、2000年

「展示業務の紹介」『和歌山県立文書館紀要』５、2000年

鹿毛敏夫「文書館展示のアイデンティティ－記録史料展示の理論と実践」『史料館研究紀要』６、大分県立先哲史料館、2001年

久部良和子「日本復帰30周年記念特別展『資料にみる沖縄の歴史』を終えて」『アーカイブズ』10、2002年

白井哲也「文書館の利用と普及－利用者論の視点から」『アーカイブズの科学』上、柏書房、2003年

中島康比古「国立公文書館における展示について」『北の丸』36、2003年

山田英明「文書館における展示業務に関する一考察－平成15年度歴史資料展を事例として」『福島県歴史資料館研究紀要』26、2004年

「展示業務の10年間」『神奈川県立公文書館紀要』５、2004年

豊川公裕「文書館展示のあり方－千葉県文書館企画展を例に」『千葉県の文書館』９、2004年

西向宏介文書館における連携事業と出張展示『広島県立文書館紀要』８、2005年

西山伸「大学文書館における展示活動－常設展『京都大学の歴史』を中心に」『京都大学大学文書館研究紀要』３、2005年

吉嶺昭「沖縄県公文書館移動展について－平成16年度移動展を中心に」『沖縄県公文書館研究紀要』７、2005年

金原祐樹「徳島県立文書館の展示に関するアンケート結果」『徳島県立文書館研究紀要』５、2005年

渡辺智裕「展示をどう考えるか－福島県歴史資料館の試み」『アーカイブズ』19、2005年

今井啓介「展示活動に文書館の独自性を追求する試み－群馬県立文書館の実践をとおして」『双文』23、2006年

渡辺智裕「福島県歴史資料館における収蔵資料テーマ展活性化の試み－指定管理者時代の文書館普及活動を射程に入れて」『福島県歴史資料館研究紀要』28、2006年

菅真城「広島大学文書館企画展示『金井学校の二人展：平岡敬と大牟田稔』の記録」『広島大学文書館紀要』８、2006年

野田宜弘「地方公文書館における展示事業のあり方」『公文書館専門職員養成課程修了研究論文集』平成17年

度、2006年
国立公文書館つくば分館「つくば分館の展示について」『アーカイブズ』26、2007年
（重田正夫）「埼玉県立文書館における展示事業のあゆみ」『文書館紀要』20、埼玉県立文書館、2007年
塩満正哉「特別展・展示実績と今後の課題について」『北の丸』40、2007年
小宮山道夫「広島大学文書館企画展示2007『梶山季之資料展 君は梶山季之を知っているか!』の記録」『広島大学文書館紀要』10、2008年など。

７）中島康比古「国立公文書館における展示について」注６）参照。中島氏は、法的根拠や先行研究の検討を通して「展示観覧を広義の『利用』として捉え直しても、なお、閲覧は第一義的な利用形態である」「公文書館等の存在意義の本質に忠実であるためには、所蔵資料の紹介に徹することが公文書館の展示の基本原則であるということを改めて確認しなければならない」としている。

８）ただ、この法改正についての職員の見解では、「国立公文書館における公文書等の利用形態としては、閲覧だけでなく写しの交付等も含まれるということを改めて確認したもの」という理解であり、閲覧に直接関連した利用であり、展示を含む利用形態が具体的に例示されているわけではない（酒井勤「国立公文書館法の一部改正について」『アーカイブズ』２、2000年）。

９）吹き抜け上部の排煙窓に紫外線カットフィルムを貼った現在でも、このスペースでは原本の展示は行っていない。

10）開館時から2003年度「江戸時代の村から近代の村へ」、2004年２月から「福井県誕生」、2005年２月から「あらぶる・うるおす川」、2006年１月から「白山紀行－ふくいからの参詣記録」を実施。

11）閲覧室でのパネル展示の試みとしては、業務改善のための全庁的なBPR運動の一環として、一般職員が「文書館の認知度アップと利用者増加」を目的とした「閲覧室ミニ展示 38豪雪・56豪雪写真展」（2006年３月７日～４月28日）が取り組まれた。ほぼ時期を同じくして藤野厳九郎家文書の寄託とその展示に関連し、館および情報公開法制課職員間の議論のなかで、原本展示の必要性が強く指摘された。

12）鹿毛敏夫「文書館展示のアイデンティティー－記録史料展示の理論と実践」注６）参照。

13）外寸幅180cm、奥行100cm、高さ90cm、セミエアタイト型、キャスター付。

14）北京魯迅博物館から本県へ寄贈。

15）９日間の合計入館者数は、523人（１日平均約58人）であった。これは昨年度同時期の入館者152人の約3.4倍にあたる。

16）後日談として笑い話にもなるのだが、展示ケースの幅は閲覧室入口の自動ドアのストッパーを外してようやく通過できる長さであり、搬入・搬出にコストがかかることが、ケースを常時閲覧室に置いて継続的に活用していく要因ともなった。

17）屋内の入口・ガラス壁面には可視光透過率が高い透明タイプを、排煙窓には反射タイプを施工した。

18）国立公文書館では、国際公文書館会議（ICA）の温帯気候における資料保存に関する委員会監修の「アーカイブズ資料の展示に関するガイドライン」を翻訳・公開している（http://www.archives.go.jp/law/pdf/tenji.pdf, 参照 2009-02-10）。

19）企画展示（８月・９月）以外は、職員が作製。

20）当初は、ポスターを文書館入口ガラス面・エントランスホール・図書館入口等館内に掲載、チラシの館内設置くらいであったが、福井駅からの無料バス（フレンドリーバス）でのポスター掲示、文書館ウェブサイトで展示概要紹介（2007年１月から）、県広報課の新聞広報「県からのお知らせ」掲載、県庁ウェブサイト「おでかけふくい（イベント情報）」掲載などインターネットへの情報提供を加え、2009年１月分からは、県庁記者クラブへの資料配布、県庁ウェブサイト「報道発表資料」掲載を開始した。

21）証言の一部は、福井県文書館編『文書館だより』12、2008年10月発行に掲載。

22）西山伸氏は大学文書館の常設展示を準備するにあたって留意したとして「多様な展示方法」「学術研究成果の取り扱い」「『負の側面』の記述」「学生生活も重視する」「地域との関係」「近年の改革の取り扱い」の６点を挙げ、戦争協力など大学の「負の側面」をいかに正確に展示していくかという課題を取り上げている（西山伸「大学文書館における展示活動－常設展『京都大学の歴史』を中心に」『京都大学大学文書館研究紀要』３、2005年）。

23）東京都公文書館ウェブサイト、「東京都公報の歴史～町触から公報まで」http://www.soumu.metro.tokyo.jp/01soumu/archives/0716kouhou.html（参照 2009-02-10）.

24）その際、同一資料が長期間展示されることがないよう留意が必要だろう。

25）たとえば、展示している名所案内図と同じ資料群中にある手控えから、旅行者・旅程・宿泊地・物価などがわか

る、といった資料群内の関連を具体的に入館者に示すことができる（2009年１月展示「文書館で初もうで－寺社名所案内図」）。

26）山田英明氏は、「展示は閲覧可能な資料によって構成されるべきである」という立場から、「観覧から閲覧へ」の流れを意識した展示の工夫・スキルをまとめている（山田英明「文書館における展示業務に関する一考察－平成15年度歴史資料展を事例として」『福島県歴史資料館研究紀要』26、2004年）。

27）坪川敏幸・島田芳秀「学校教育との連携について」『福井県文書館研究紀要』６、2009年３月参照。

28）県立図書館で開催されているドラマ化記念「築山桂」特集に関連して、緒方洪庵の翻訳書・著書を紹介。

29）西向宏介「文書館における連携事業と出張展示」『広島県立文書館紀要』８、2005年、久部良和子「公文書の利用と普及（移動展の役割）－八重山・名護・宮古の事例より」『沖縄県公文書館研究紀要』２、2000年、吉嶺昭「沖縄県公文書館移動展について－平成16年度移動展を中心に」『沖縄県公文書館研究紀要』７、2005年。

30）前掲、西向論文。

31）同じ写真による展示でも、2008年10月のスポーツ編では１日あたり24.7人と地域をテーマにしたものより観覧がかなり少なかった。

32）アンケート用紙と回収箱は閲覧室の入口付近に設置し、展示ケース２本の上部とアンケート用紙設置場所の計３か所にアンケート協力のお願いの掲示をおこなった。

33）文書館では、閲覧室入館者数と、研修室使用者数の合計を利用（入場）者数としてカウントしているが、アンケートは閲覧室に設置されているので今回の入館者数には閲覧室入館者数を使用した。

34）入館者数を開催日数で割ったもの。

35）具体的な設問は、下記のとおりである。

１ご自身についてお聞かせください。

（1）性別[男性/女性]、（2）年齢 [～10代/20代/30代/40代/50代/60代/70代～]

２ご来館の目的は何ですか。[文書閲覧/展示見学/講座など/調査相談/研修室利用/特にない]

３今月の収蔵資料展示についてお聞かせください。

（1）展示の開催を何でお知りになりましたか。

[新聞広報/ポスター・チラシ/毎月または時々見ているため/ホームページ/
入館して知った/その他（[自由回答]）]

（2）展示をご覧になった感想をお聞かせください。

内容 [興味深い/普通/難しい　　展示数[多い/ちょうどよい/少ない]
説明 [分かりやすい/簡単で物足りない/難しい]

４　展示の感想や文書館への要望などがありましたら、ご記入ください。[自由回答]

なお、2008年12月の「古文書に親しもう３－かなをたよりに読む」では、古文書入門講座に関連する展示ということもあり、アンケートにも３（3）古文書に興味をもち、今後学習していきたいですか［はい/いいえ］、３（4）「（3）で、はいと答えた方におたずねします。どのようにして学習されますか［古文書講座を学習したい/自主的に学習する/その他([自由回答])]」という設問を増やし、展示から講座へのつながりを持たせる工夫をしている。

36）前掲注６）吉江論文、29）西向論文。

37）注33）参照。

38）白井哲也「文書館の利用と普及－利用者論の視点から」『アーカイブズの科学』上、2003年。

39）当館の資料群目録（古文書のみ）は、データベースに連動するかたちでウェブサイトで公開しているため、google等の検索エンジンに登録されず、現状ではウェブ上から「みえない」情報になってしまっている。